

博士學位論文要約

論文題目： 新人ソーシャルワーカーの成長に関する研究—特別養護老人ホーム
生活相談員のネガティブな経験に対する語りに着目して—
氏名： 孫 希叔

要約：

本研究の目的は、特別養護老人ホーム（以下、特養）に従事する生活相談員のネガティブな経験に対する語り注目し、新人ソーシャルワーカーはそれをどのように変容させ、自らの成長につなげているのかを明らかにすることである。

序論では、研究意義を明確にするために、実践的背景、先行研究の検討を行い、研究の目的と課題を設定した。実践現場において、新人ソーシャルワーカーが様々な困難や葛藤、悩みやジレンマといったネガティブな経験に直面することは避けられないことであり、これを切り抜けられない場合は、早期の離職に至ることもある。一方、それを転換点に捉えることで、ネガティブな経験はその者の成長を促す重要な契機ともなりうる。この場合、新人ソーシャルワーカーが直面するネガティブな経験とそれをきっかけとする成長の可能性は検討すべき課題である。そこで、ソーシャルワーカーの「成長」、「ライフヒストリー」、「バーンアウト」、「感情労働」、「レジリエンス」等に関する文献検討を行った。その結果、近年は専門的な力量形成という視点からソーシャルワーカーの成長を解明する研究が進んでいるものの、一人の職業人として悩みながら実践し続ける中で形成されたネガティブな経験の捉え直しとそれによる成長の関係はいまだ十分に解明されていない。これらのことから、新人ソーシャルワーカーの抱えるネガティブな経験の捉え直しとそれによる成長のプロセスを解明するため、以下の4つの研究課題を立て、検証を行うこととした。

課題1 ネガティブな経験の構造の明確化

課題2 ネガティブな経験への対応と変容に関する仮説の設定

課題3 ネガティブな経験を乗り越える際の行動の変容と生成プロセス

課題4 ネガティブな経験を乗り越えることができたソーシャルワーカーによるネガティブな経験とその変容プロセス

本論では、本研究の目的と課題に基づき、ネガティブな経験の構造の明確化、仮説の設定及び検証を行った。

まず、課題1では、「ネガティブな経験の構造を明確化」するために、新人ソーシャルワーカーが実践の中で、困難や葛藤を抱え込み、それを乗り越えないものと感じ「辞めたい」と思い悩む際、どのような判断や行動を行っていたのかについて検討した。調査対象者は、特養に従事する3年未満の生活相談員とし、15名への半構造化面接調査を行った。そこで得られたデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、新人ソーシャルワーカーが実践の中で直面するネガティブな経験は、4つのコアカテゴリー、11のカテゴリー、27の概念で構成されていることが明らかになった。これによ

ると、新人ソーシャルワーカーは、《自分が描くイメージとのずれ》や《異なる価値観の押し付け》に対応できず、《良質な実践経験の不足》が加わる中、業務がスムーズにできない重圧感を経験していた。これに、《経験の共有の不足》や《振り返る能力の不足》、さらに《自己への否定的な評価》が強く影響していたため、《業務の過度な一般化》や《スタンスの違う思いとの妥協》、《他者に頼る行動》をとりながら、状況の改善を図ろうとするものの、自分の持っている力を発揮することができず、《混沌とした不安》や《切り替えのできない気持ち》を抱えていた。以上の結果により、新人ソーシャルワーカーが抱えるネガティブな経験は、慣れない業務を遂行せざるを得ない立場にある新人ソーシャルワーカーが、持ち合わせている自分の価値観や考えとそぐわない部分に適応できる対処法を見いだせない状況であることが明らかになった。

課題2では、「ネガティブな経験への対応と変容に関する仮説の設定」のために、事例を通して、どのような状況でネガティブな経験が生じているのか、それにどう対処し解決できたのか（できなかったのか）、さらにそれに影響する要因は何かについて検討した。なお、調査対象者および方法、分析手法は、課題1と同一で、分析には3名のデータを用いた。その結果、新人ソーシャルワーカーが『直面している困難』は、『組織の状況』と『自身の状態』の中で生じていることが明らかになった。これによると、彼・彼女らは、『対処するための手掛かり』の中から、『対処する行動』を選び、行動に移していた。次第に『直面している困難』は、問題は解決・軽減、あるいはさらに悪くなる、といった『結果』を迎える。ここで、自らがとった『対処する行動』と『結果』との関係を明確に意識することができると、新人ソーシャルワーカーは新たな『学び』を得ていた。そして、この『学び』は、次の実践における『対処するための手掛かり』となり、再び『対処する行動』として具現化されていた。この結果は、ネガティブな経験を捉え直すことが、ソーシャルワーカーの成長を紡ぎ出す有効な方策になることを意味している。以上の結果により、新人ソーシャルワーカーがネガティブな経験を捉え直し、成長に結びつけていく過程は、『直面している困難』、『対処する行動』、『結果』、『学び』の4つの循環的な関係への示唆が促され、探索的な仮説を提示することにつながった。

課題3では、「ネガティブな経験を乗り越える際の行動の変容と生成プロセス」を解明するために、新人ソーシャルワーカーがネガティブな経験を乗り越える際の対処行為はどのように変容し、生成されているのかを検討した。なお、調査対象者および方法、分析手法は、課題1と同一で、分析には4名の縦断的なデータを用いて分析した。その結果、新人ソーシャルワーカーが行っている対処行為の生成と変容は、3つのコアカテゴリー、4つのカテゴリー、13のサブカテゴリー、32の概念で構成されていることが明らかになった。これによると、自らの実践において行き詰まりや困難に気づいた新人ソーシャルワーカーは、【他者の経験を媒介としたアプローチ】と【自己の経験を媒介としたアプローチ】を通して、自己の実践力の磨きと同時に実践態度についての理解を深め、『問題状況の捉え方の変容』を見いだしていた。このような循環を積み重ねることで、新人ソーシャルワーカーは、援助専門職としての成長ともいえるべき『実践に取り組む姿勢の変容』を獲得していた。この結果は、課題2において提示した仮説が支持されたことを意味する。以上の結果により、実践に対する他者の行為や自己の行為、相互作用によって生成された行動の変容

は、省察を繰り返すことで自己の行動様式として再構築され、より洗練された行動パターンを生み出していることが示された。

課題4では、「ネガティブな経験を乗り越えることができたソーシャルワーカーによるネガティブな経験とその変容プロセス」を解明するために、新人期を終えたソーシャルワーカーが自らの新人期を振り返るなかでみられるネガティブな経験の肯定的な意味づけに注目し、どのようなプロセスを経て、肯定的に意味づけられていくのか、その対処法とそれに影響するものは何かを実証的に検討した。調査対象者は、5年以上の実務経験を有するソーシャルワーカーとし、課題1と同一の方法で行った。分析は11名のデータを用いて質的データ分析を行った。その結果、ソーシャルワーカーが直面するネガティブな経験を肯定的に意味づけていくプロセスは、8つの概念的カテゴリー、19の上位コード、52のコードで構成されており、時間の経過や状況の変化とともに7つの局面をみせていることが明らかになった。これによると、①【期待と異なる現実に対面する】ことで、②【目指す方向性を失う】、③【ゆらぐ】状態に陥っていたソーシャルワーカーは、「重要な他者」の支持を得ることで、④【自分の役割を意識する】ようになり、⑤【自らを変化させる】、【磨く】ことを通して、自身の知識や技能を深めていた。⑥【自らの行動と状況の変化を結びつけて再吟味する】ことで、新たな気づきを得た彼・彼女らは、自己洞察による自信と他者からの肯定的なフィードバックによって、⑦【揺るがない実践力】を掴んでいた。このことは、ネガティブな経験を捉え直すプロセスは、自らの実践の方向感覚の喪失を経験したソーシャルワーカーが、周囲との相互作用の中で、主体としての自分自身を認識し、新たな視点や拡大された視野を獲得していく成長のプロセスであることを意味する。この結果は、課題2と課題3で整理した知見を支持するものである。以上の結果により、実践現場で直面するネガティブな経験の捉え直しは、新人ソーシャルワーカーの成長において、有効な方策となることが示唆された。

以上、4つの実践検証により課題1～課題4を解明し、新人ソーシャルワーカーが実践場面においてネガティブな経験に直面しつつも、折り合いをつけながら専門職として成長していくプロセスについて説明した。

結論では、本研究のまとめ、研究成果、今後の課題について述べた。本研究のまとめでは、本研究の目的、目的達成のために立てた4つの課題及び仮説の検証から明らかになった、新人ソーシャルワーカーがネガティブな経験を捉え直し、それを自らの成長に結び付けていくプロセスについて再確認した。次いで、研究成果では、4つの課題より得られた知見から、新人ソーシャルワーカーがネガティブな経験を捉え直し、成長に結び付けていく過程の特徴として、①他者との相互作用を通じて育まれること、②省察を深化させる経験が必要であること、③自己の経験を通して学び得たことが継承されていくこと、という研究成果が得られ、これに基づく支援のあり方が提示できた。最後に、今後の課題として、①ネガティブな経験を発生させる要因を、包括的な枠組みで検討すること、②妥当性の検討として、多数例を対象とした量的調査などを重ねて行うことの必要性をあげた。